



## 道端の小石

実社会での体験教育プログラムも、数をこなすと「失敗したな」と感じる事が少なからず出てくる。

今から約10年前、インドネシアの美しい古都ジョクジャカルタに学生たちと一緒に出掛けた。異文化交流のため、現地の大学生と寝食を共にして地域貢献の活動をしながら世界の問題を夜通し語り合うというのが主な内容だ。しかし、国際テロ組織の暗躍で世界は分断された状況にあり、計画していた内容の半分も消化できなかつた。身動きの取れない学生たちはゲストハウスのみでの交流活動を強いられ、本当に気の毒な思いをさせた。

先日、この申し訳ないと思うプログラムに参加した卒業生から電話をいただいた。彼はこれまでの職場を退職し、ライフワークとしていた映像作成で仲間と起業をするという。

そして彼はこう言ってくれた「インドネシアでの体験が僕の人生を大きく変えた、ありがとう」。こちらは「消化不良で申し訳ない」と思っているのに思いもよらぬ言葉に涙が出た。

三島由紀夫はこんな言葉を残している。「体験を体験足らしめる力、それを人々は才能という」。どうしたことかというと、体験という言葉は「エペレストに登った」というような大きなことだけを指すのではない。道端の小石につまずいた、程度でも人生を大きく左右することがあるのだと。ほんのわずかなことでも自身の原体験になりうると説く三島の言葉を思い出しながら、才能あふれる若者との出会いに心から感謝した。

年度末を前に振り返ると、できなかつたことの方が多かった一年であった。悔しい思いも沢山してきた。しかし、丁寧に思い返すとそこには必ず「道端の小石」のような原体験のきっかけがあるはずだ。どのような状況下にあっても「決しておろそかに生きてはいけないとまた一つ、若者から教わった気がする。

---

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。40歳。